

<ヒアリング報告>

## 主体的な学びを促進するための学習支援構築に向けて —学生へのヒアリング調査から—

千葉 美保子<sup>1</sup>

学生の自律学習空間「雄飛館ラーニングcommons」内に設置されている学習支援カウンターでは、3名の学習支援員（任期付職員）が常駐しているが、2013年10月の仮オープン以降、直接的なスタディ・スキル支援の場としての、また学生と教員・その他の支援機関とを仲介する場としての試行が続けられている。具体的には、(1) 雄飛館ラーニングcommonsのスペースを活用した日本語/英語ライティング・プレゼンテーションの個別相談対応、(2) 日本語/英語学習に関するワークショップ実施、(3) ICT機器の利用相談を通じて、学生に対する学習支援を行っている。さらに、グローバル人材育成事業（現「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援」）の一環として、英語eラーニングシステムのヘルプデスクを兼ね、ラーニングcommonsを起点として学生の主体的な学びをワンストップで支援している。本報告では、学生に対するヒアリングを通じ学習支援ニーズや学習傾向を改めて分析し、学習支援カウンターにおける主体的な学びを促進するための支援体制の構築へ向けた考察結果を報告する。

キーワード：学習支援、初年次教育、スタディ・スキル、ラーニングcommons

### 1. はじめに

近年、国内のさまざまな高等教育機関において、「学習支援」に関する取り組みが実施されている。日本学生支援機構の「大学等における学生支援の取組状況に関する調査（平成25年度）」（2014）によれば、国内の高等教育機関の38.6%が「学習支援センター等による個別指導」を実施しているという。

京都産業大学（以下、本学）においても、学習支援の一環として幅広い取り組みが行われている。学生の自律学習空間「雄飛館ラーニングcommons」内に設置されている「学習支援カウンター」では、2013年10月の仮オープン以降、直接的なスタディ・スキル支援の場としての、また学生と教員・その他の支援機関とを仲介する場としての試行を続けている。

本稿では、本学学生の顕在的・潜在的な学習支援ニーズに関するヒアリング調査を通じて、学習空間「雄飛館ラーニングcommons」を起点とした学生の主体的な学びを促進するための支援体制の構築へ向けた考察結果を報告する。

本稿の構成は以下の通りである。第2章では、学習支援カウンターの取り組み概要と学習支援サービスの問題点を提示する。第3章では学生へ

実施したヒアリング調査概要を説明し、第4章で導き出された結果について述べる。その結論を基に第5章で考察を加え、最後に第6章でまとめと今後への展望を述べる。

### 2. 学習支援カウンターの概要

#### 2.1. 取り組み概要

2013年10月より試験的に設置された学習支援カウンターでは、学習支援員が常駐している。学習支援員は任期付の専門職員であり、現在スタッフとして日本語と英語のライティング・プレゼンテーション支援員が各1名配置され、各種支援にあたっている（2015年11月現在）。いずれも文学、言語学で修士以上の学位を持ち、教育機関での教員・チューター歴を有している。またICT専門の支援員を1名配置し、学生の情報リテラシー能力の支援にあたっている。このように、幅広い専門性を有した職員を配置することで、学生の多様なニーズに対応できる学習支援環境を維持している。職員が学習支援員として常駐することで、学生スタッフが対応するのよりも専門的に、教員が対応するよりもフラットな関係性をもって支援にあたるのが可能になっている。

<sup>1</sup> 京都産業大学 学長室グローバル化推進室

## 2.2. 支援メニューとニーズ

学習支援カウンターで展開される支援は2013年に実施した学習環境ニーズ調査の結果に基づき支援メニューを選定し、設置された<sup>1)</sup>。

具体的には以下の3つのサービスである。(1) 雄飛館ラーニングコモンズのスペースを活用した日本語/英語ライティング・プレゼンテーションの個別相談対応、(2) 日本語/英語学習に関するワークショップ実施、(3) ICT機器の利用相談を通じて、学生に対する学習支援を行っている。さらに、グローバル人材育成事業(現「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援」)の一環として、英語eラーニングシステムのヘルプデスクを兼ね、ラーニングコモンズを起点として学生の主体的な学びをワンストップで支援している。

個別相談では、朱入れなどの添削指導やProofreading(スペル・文法チェック)は行わず、学生が持参した資料やデータをPCモニターで見ながら、学生との「対話」を重ねることで、学生がアイデアを整理し、自ら疑問点やその解決策を探求し、考えを表現し、発信する力を養うよう支援している。2014年4月より実施している任意の利用者アンケートでは、5段階評価で4.8と非常に高い満足度を得ている(2015年11月末現在、有効回答106件)。また、大学での学びに必要な知識・スキルの習得の支援を目的に、2014年春学期よりライティング・プレゼンテーション等スタディ・スキルに関するワークショップをラーニングコモンズ内外で実施し、2015年度からは正課科目との連携を試行的に進めている。

一方で、学習支援カウンターの利用状況は芳しくはなく、本学学生を対象に実施された「平成26年度 学生生活実態調査」では、「自己学習をする時、雄飛館ラーニングコモンズで受けた支援はありますか」という設問に対し、回答754件中、65.6%( $N=495$ )が「特になし」と回答しているなど、学生に対してのアプローチ方法の検討が急務となっている。

そこで本稿では本学学生に対するヒアリング調査を通じて、学生の顕在・潜在的な学習支援ニーズを明らかにし、雄飛館ラーニングコモンズが展開し得る支援体制への構築に向けた考察結果を報告する。

## 3. 方法

### 3.1. 対象

雄飛館ラーニングコモンズを正課、正課外学習、イベント参加など何かしらの形で利用した経験の

ある本学学部学生のなかから協力を募り、2～4年次の男女12名(学習支援カウンター利用経験者2名/非経験者10名)を対象にヒアリング調査を実施した。回答者12名(A～Nと呼称する)の属性は表1に集約している。

表1. インタビューイヤーの属性

回答者	性別	学部	学年	学習支援カウンター利用歴
A	男性	コンピューター理工	2年次	なし
B	女性	外国語	3年次	あり(1回)
C	男性	法	3年次	なし
D	女性	理	4年次	なし
E	男性	法	4年次	なし
F	女性	経営	2年次	なし
G	男性	経営	3年次	あり(3回以上)
H	女性	経営	2年次	なし
I	男性	経営	3年次	なし
J	男性	経済	3年次	なし
K	女性	コンピューター理工	3年次	なし
N	男性	外国語	2年次	なし

### 3.2. 調査方法

面談期間は2014年12月から2015年1月に実施し、面談時間は約40分～60分であった。ヒアリング調査開始前に、スタディ・スキル、特に文章力とプレゼンテーション力に関する簡易調査票への記入を求めた(表2)。

ヒアリング調査は半構造化面接の形式で実施し、「大学生活での授業課題や発表準備の段階で困った点・支援がほしいと感じた経験」、「利用したい支援」や「レポート・プレゼンの作成過程」といった項目を通じて、本学学生の学習傾向および潜在的なニーズを把握する目的の質問を中心に聞き取りを実施した。ヒアリング内容は対象者に了承を得てICレコーダに記録したものを著者が文章に起こした上、大谷(2008)のSCATの分析手法を参考にしながらカテゴリ分析を行い、回答者が感じているストーリー・ラインを作成した。このような質的データは、学生の潜在的な部分を探るために有効な分析であると考えられる。

表2. 文章力・プレゼンテーション力に対するイメージ

項目	2回生 (N=4)	3回生 (N=6)	4回生 (N=2)	平均 (N=12)
1 文章力への自信	2.50	1.67	3.50	2.25
2 文章力への不安	4.25	4.67	4.00	4.42
3 文章力への向上努力	2.25	3.33	3.50	3.00
4 文章力の必要性 (大学生活)	4.75	4.67	5.00	4.75
5 文章力の必要性 (卒業後)	5.00	4.83	5.00	4.92
6 プレゼンテーション力への自信	2.75	2.80	2.50	2.75
7 プレゼンテーション力への不安	3.50	4.00	3.50	3.75
8 プレゼンテーション力への向上努力	2.00	3.50	3.50	3.00
9 プレゼンテーション力の必要性 (大学生活)	4.75	4.70	4.50	4.67
10 プレゼンテーション力の必要性 (卒業後)	5.00	4.50	4.50	4.67

樋口ほか (2012) に項目を追加

#### 4. 結果

##### 4.1. ヒアリング調査を通じた学習傾向を示す概念

調査の結果、以下のような本学学生の学習傾向を示す6つの概念が得られた。すなわち、「文章作成に不安・苦手意識を持つ」「スキル向上に意識が湧かない」「プレゼンテーションを重要視」「初年次での戸惑い」「教員等からのフィードバックの不足感」「他者への相談をためらう」である。それぞれの概念と対応する主な発言を表3に示す。

ストーリー・ラインは次のようになる。

ストーリー・ライン：本学学生は漠然とではあるが、文章力やプレゼンテーション力、特に【文章作成に不安・苦手意識を持つ】傾向にある。大学生活や卒業後も必要なスキルであると認識しつつも、現時点では【スキル向上に意欲が湧かない】。そのようななかでも、課題においてはフィードバックが多い【プレゼンテーションを重要視】する傾向がある。この背景には、【初年次での戸惑い】やレポート課題に対する【教員等からのフィードバックの不足感】が考えられる。この初年次での戸惑いとフィードバックの不足が、レポート課題に行き詰まっても、基本的には【他者への相談をためらう】傾向を生み出す要因となっていると考えられる。

##### 4.2. レポート・プレゼン資料の作成プロセス

また、「レポート・プレゼンの作成過程」のヒアリングをもとに、本学学生の作成プロセス傾向が導き出された。ここでは理工系(回答者 A, D, K)、人文系(回答者 B, C, E ~ J, N)と大きく2つの分野で傾向を分け、抜粋を示す。その上で、行動に潜む潜在的ニーズに関して考察する。

##### 4.2.1. レポート・プレゼンの作成プロセス(理工系)

###### (1) レポート

- ① 予習 (手順書を読む)
- ② 実験
- ③ データを検討
- ④ 手順書を振返る
- ⑤ 実験概要を書く
- ⑥ 実験の方法を書く
- ⑦ 実験結果 (データ) を挿入
- ⑧ 考察
- ⑨ レイアウトを整える
- ⑩ 提出

理工系レポート、特に実験レポートの場合、テキスト (手順書) を基にして作成するため、理系学生はテーマや書式に戸惑うことなく自力で作成している傾向がある。しかし、実験方法および考察の記述方法に関しては、周りの同級生や先輩学生、教員に質問、確認しながら作成する傾向が見られた。

###### (2) プレゼン発表

- ① 課題について調べる
- ② 構成を組み立てる
- ③ スライドを作成して膨らませていく
- ④ スライドの資料を印刷し、メモをする
- ⑤ 発表練習を行う
- ⑥ 発表

実験レポートを発表する場合もまた、比較的周りや教員に相談する傾向にある。発表練習については、必ずしも毎回行うわけではないが、比較的練習を行う傾向にあった。

表 3. ヒアリングから得られた概念と対応する記述

- 1 文章作成に不安・苦手意識を持つ
  - ・文章力がなくて、うまく言葉が伝えられない
  - ・文章力は自信がない。(以前作成したプレゼンの)構成とかすごい不安。内容とタイトルがあってるのか、すごく不安
  - ・文章力が中学生並
  - ・(プレゼンよりも)レポートの方が苦手意識がある
- 2 スキル向上に意欲が湧かない
  - ・努力とか全然してなくて。本とか読んだら絶対上がると思うんですけど、あんまり時間も取れないし…
  - ・自覚はしてるけど、行動がなかなかできない
- 3 プレゼンテーションを重要視
  - ・プレゼンだけは人に負けたくないって意地があるので、(相談員や先生に)聞いたりするけど、文章はまったくしない。その場をやり過ごせばいい。……プレゼンへの熱量と文章への熱量が本当に違う
  - ・レポートについては(フィードバックは)ほとんどない、プレゼンについては結構ある
  - ・(レポートは相談しないが)プレゼンの時は、つまったときに周りに質問する
- 4 初年次での戸惑い
  - ・やる気があるのに、とっかかりが分からずに、やる気がなくなる。調べる足掛かりをつくってほしい。一年生には、本を探すという考えがない
  - ・大学に入った時、「レポートを書け」といわれてうろたえた
  - ・(一年生の時のインターンシップ報告会の際)プレゼンを相談できる場所がなく、不安だった
- 5 教員等からのフィードバックの不足感
  - ・(レポート課題は)出して、点数が返ってくるけど、何がどういいレポートなのか、分からない
  - ・レポート課題だと(フィードバックが)あまりない、出したら出したで終わり
  - ・返却されないの、どこが悪かったのか、どういうところがいけなかったのか分からない。フィードバックがあったら次回に参考になるんだろうけども
  - ・提出しても点数が分からない。どこがよくてどこが悪いのか分からない。直しようがない
- 6 他者への相談をためらう
  - ・友人や先生には相談しない。性格のあらを(表に)出したいくない
  - ・先輩には聞かないですね。多分、「こんなもできないの?」って思われるのがいやなんですよ
  - ・考えを批判されたくない

#### 4.2.2. レポート・プレゼンの作成プロセス(人文系)

##### (1) レポート

###### テーマが自由な場合

- ① おおよその目ぼしをつけて資料を探す
- ② 資料を集める
- ③ テーマを決める
- ④ 構成を組み立てる
- ⑤ 執筆
- ⑥ 見直し
- ⑦ 提出

###### テーマ(課題図書)が設定されている場合

- ① 課題図書を読み、メモをとる
- ② 構成を組み立てる
- ③ 執筆
- ④ 見直し
- ⑤ 提出

人文系レポート、特に論証文の場合は、おおよそのテーマを設定した上で、インターネット上で資料を探し、レポートを書き始める傾向があるこ

とが明らかになった。レポート課題の内容に大きく依存するが、「課題の過程で本の指示がされない限り本は使わない(回答者I)」というコメントもあり、レポート作成の過程において、図書資料を活用しない傾向が見られた。また、レポートの作成途中で教員や周囲に相談することはほとんどなく、自力で作成する傾向にある。一方で、人文系回答者すべてが提出の前に原稿の見直しを行っており、特に誤字脱字や言葉遣いについて確認をすると答えている。

##### (2) プレゼン発表

- ① 課題について調べる
- ② 構成を考える
- ③ スライドを作成して膨らませていく
- ④ スライドの資料を印刷し、メモをする
- ⑥ 発表練習を行う
- ⑦ 発表

演習などで発表をする場合は、グループプレゼンの割合が多いこともあり、周りや教員に相談し、

事前の発表練習を行う傾向にある。

## 5. 考察

本学学生は文章力やプレゼンテーション力に漠然としつつも強い不安感を持つ傾向にある。予備アンケート調査でも明らかなように、特にプレゼンテーションに比べ、文章力に不安を感じている割合が高い。また、初年次でのレポート・プレゼンテーションの際の戸惑いを口にしており、4年次の学生にとっても忘れがたいエピソードとして記憶に留まっている。

つまり、レポート課題に関しては、フィードバックの不足により、自らが作成したレポート課題や資料の問題点・改善点を焦点化できておらず、どのように改善をすればよいか分からないままに、教員とのコミュニケーションの欠落による意欲減退が起こっている可能性が考えられる。実際、プレゼンテーションに関しては、比較的授業中にフィードバックを受ける機会が多く、それに比例するように事前練習を積極的に行うなど、学習意欲が高い。

また、レポート課題に対してほかの対象者に比べ意欲的に取り組んでいる者（回答者 C, E）は、初年次に受講した、もしくは SA（スチューデント・アシスタント）として関わったスタディ・スキル科目での経験値が影響していると語っている<sup>2)</sup>。

## 6. 展開へ向けて

他者に相談することに抵抗を感じる本学学生にとって、職員が常駐する学習支援カウンターへの相談はハードルが高いようだが、その一方で、相談対象が固定化されてしまうため、フィードバックや意見を交わす第三者の存在が顕在的・潜在的に求められている。

対話型の支援は点数化ができないゆえに、目に見えた効果が表れにくい。しかし、相談利用者の意識の変化は目を見張るものがある。今回調査対象者である学習支援利用者の2名ともに、「考えていた事を質問されて答えると自分の考えがより明確になった（回答者 B）」「（相談してからは）2・3回見直しをするようになり、文章表現などを気にするようになった（回答者 G）」というコメントを残している。一歩ずつではあるが、支援を通じて、着実に学生自身が「自ら考え・気づく」ことを意識するようになってきている。

このように、学生に対して「意識の変化」をもたらすことができる学習支援カウンターは、正課

外での個別相談対応、ワークショップ展開だけでなく、これまで以上に初年次正課科目と連携することで、初年次教育における躓きと、フィードバックの不足感を補い、本学学生の学びへの意欲の維持を支援することができるだろう。また、それらの取り組みを、FD 活動に連動させることが可能だ。特に、科目担当教員とともにモジュール開発や F 工房のような本学既存部署を介した授業運営デザイン・個別相談利用指示などを行うことで、直接的な授業改善につながる。

今後は教員へのヒアリング調査等を通じ、より具体的な支援メニューの構築を進めていきたい。

## 謝辞

本ヒアリング調査に協力いただいた皆様に感謝申し上げます。なお、本稿は千葉、松井（2015）「学生の主体的な学びを支援する仕組みづくりに向けて－学生へのヒアリング調査から－」第 21 回大学教育研究フォーラムに大幅に加筆修正を加え、新たに執筆したものであり、文部科学省「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援」事業の成果の一部である。

## 注

1) 学習支援内容選定のプロセスについては、千葉美保子、松井きょう子、中沢正江（2015）多様な学習スペースを活用した学習支援・教育支援の試み－雄飛館ラーニングコモンズにおける新たな学びへの支援－。高等教育フォーラム 5: pp.47-56 を参照されたい。

2) 本学における SA の活動の事例としては、伊藤琴音、吉永一行（2013）法学部「プレップセミナー」におけるスチューデント・アシスタント（SA）の試み。高等教育フォーラム 3: pp.39-43 を参照されたい。

## 参考文献

- 伊藤琴音、吉永一行（2013）法学部「プレップセミナー」におけるスチューデント・アシスタント（SA）の試み。高等教育フォーラム 3: pp.39-43.
- 大谷尚（2008）4 ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案－着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き－。名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）。Vol.54.No.2: pp.27-44.
- 京都産業大学学長室・学生部（2015）平成 26 年度 学生生活実態調査報告書。
- 千葉美保子、松井きょう子、中沢正江（2015）多様な学習スペースを活用した学習支援・教育支援の試み－雄飛館ラーニングコモンズにおける新たな学びへ

- の支援－. 高等教育フォーラム 5: pp.47-56.
- 千葉美保子, 松井きょう子 (2015) 学生の主体的な学びを支援する仕組みづくりに向けて－学生へのヒアリング調査から－. 第 21 回大学教育研究フォーラム発表論集: pp.132-133.
- 樋口隆太郎, 林田定男, 出口由美, 山田嘉徳, 金田純平 (2012) 文学部におけるライティング環境調査－卒論ラボを中心に－. 関西大学高等教育研究 3: pp.69-79.
- 日本学生支援機構 (2014) 大学等における学生支援の取組状況に関する調査 (平成 25 年度). [http://www.jasso.go.jp/gakusei\\_plan/2013torikumi\\_chousa.html](http://www.jasso.go.jp/gakusei_plan/2013torikumi_chousa.html) (2015.11.30 閲覧)

KEYWORDS: Learning support, First Year Experience, Study skill, Learning Commons

---

2016 年 2 月 25 日受理

1 University Internationalization Project, Office of the President, Kyoto Sangyo University

---

## Interviews with Students toward Constructing Learning Support for Active Learning

---

Mihoko CHIBA<sup>1</sup>

The learning support counter established inside the “Yuhikan Learning Commons”, an extracurricular learning space for students, regularly maintains three resident learning supporters (fixed-term staff). Since its inauguration in October 2013, the counter has been experimentally operating as a mediator between students and faculty members or other supporting organizations. In particular, it provides learning support for students through the following: 1) individual consultations for Japanese and English writing presentations, using the Yuhikan Learning Commons space; 2) workshops on study skills for Japanese and English; and 3) guidance on using ICT devices. Moreover, the counter functions as a help desk for English e-learning systems as a part of the Project for the Promotion of Global Human Resource Development, and as a one-stop support center for the autonomous study of students based in the Learning Commons.

In this report, we analyzed the requirements for learning support and learning preferences by interviewing students. In addition, we have delineated the obtained results, while considering the establishment of a support system at the learning support counter to promote autonomous study among students.